

# 葉山嘉樹へ、葉山嘉樹から

——浦西和彦先生のお仕事

竹内栄美子

『中野重治全集』第二十七巻に「葉山嘉樹」という項目の文章がある。これは、一九六六年十月号の『友樹』に掲載された「葉山嘉樹について」というアンケートに答えたものである。質問とともに再掲する。

一 葉山嘉樹について興味をもたれたことがありますか。

答え ある。最大の興味をもつ。

二 印象に残った作品がありますか。

答え ある。ほとんど全作品。

三 その作品について思うこと、また学んだもの。

答え 極上のもの。

四 現代でも葉山嘉樹文学は価値がありますか。

答え ますます。

とにかく返事を書きますが、葉山は私の先輩でも同僚でもあつて、いろいろな形で問いに答えるのは苦痛なほど

です。「現代でも……価値がありますか。」——こういう問いは、葉山を一行も読まない人の口から出るのにふさわしいと思うということをつくくわえます。諸君を非難するものではありません。(六月十日)

この『友樹』が、浦西先生が関西大学を卒業後に勤務された岐阜県立坂下女子高等学校文藝部の雑誌であることをご存じのかたは多いであろう。葉山作品を愛するあまりアンケートの質問の仕方に苦言を呈した中野重治だけでなく、小田切秀雄、佐多稲子、平林たい子、久保田正文、寺田透、平野謙なども回答し、広く反響を呼んだ雑誌特集だったようだ。一九四一年うまれで二十五歳の若き浦西先生が生徒たちとともに編集作成した雑誌と考えるだけでも、葉山研究への情熱の深さの一端に触れるような気持ちになる。翻って自分が二十五歳のときに何をしていたかといえば恥ずかしくなる思いで、この葉山特集は、卒

業論文が「源氏物語」であったという浦西先生のその後の膨大な研究成果の出発点であったのだと改めて思われた。

「浦西和彦教授略年譜」〔『国文学』第96号、二〇一二年三月、関西大学国文学会〕によれば、一九六四年三月に関西大学文学部国文学科を卒業し、四月から岐阜県立坂下女子高等学校教諭に就任、文藝部、新聞部、卓球部の顧問をされた。「坂下町の弥坂橋を越えると長野県の山口村である。山口村で葉山嘉樹が晩年を過ごした。当時、菊枝夫人が住んでいらしゃった。坂下女子高校には葉山嘉樹と親交があった歯科医の松井恭平さんが非常勤教師をしていた。葉山嘉樹の作品に出合う」とある。同じことは『浦西和彦著述と書誌』第三卷『年譜 葉山嘉樹伝』（和泉書院、二〇〇八年一〇月）のあとがきにも書かれていて、坂下町に住むようになって初めて葉山の作品に出会ったという。就職した場所が縁となってその後の研究が進められる、その偶然に、いまでも多くの学恩を蒙っている私どもは感謝しなければならぬ。

＊

一九六四年に高校教諭として着任されて以来の葉山嘉樹に関する研究成果は、まず「近代文学資料6」として『葉山嘉樹』（桜楓社、一九七三年）にまとまった。同書には「葉山嘉樹年譜」「葉山嘉樹著作目録」「葉山嘉樹参考文献目録」「葉山嘉樹宛書簡―前田河広一郎・島田晋作・青野季吉・里村欣三―」が収録されている。ついで「人物書誌大系16」として『葉山嘉樹』（日

外アソシエーツ、一九八七年）が上梓され、その後『葉山嘉樹―考証と資料』（明治書院、一九九四年）が刊行される。同書には、Iとして「葉山嘉樹」「葉山嘉樹―悲惨なる過去」の拘束、「葉山嘉樹」「セメント樽の中の手紙」「淫売婦」と『海に生くる人々』、『海に生くる人々』の改題・改稿・発表経過等について、『海に生くる人々』と「蟹工船」「葉山嘉樹の「創作構想メモ」（写真版）について」「葉山嘉樹（昭和の文学・鼎談）中野重治・寺田透・浦西和彦」が、IIとして「葉山嘉樹と室蘭」「宮嶋資夫と葉山嘉樹」「浅田隆著『葉山嘉樹論―海に生くる人々』をめぐる―」「広野八郎著『葉山嘉樹・私史』―解説にかえて―」が、IIIとして「田口運蔵の葉山嘉樹宛書簡」「荒畑寒村の葉山嘉樹宛書簡」が収録された。

のちにまとまる四卷本『浦西和彦著述と書誌』（和泉書院）の第一卷『新・日本プロレタリア文学の研究』には、右の『葉山嘉樹―考証と資料』IおよびIIIの諸編と「葉山嘉樹宛書簡―前田河広一郎・島田晋作・青野季吉・里村欣三―」が、第二卷『現代文学研究の基底』には、第一卷収録文章とは別の葉山論が収載されている。書評などもあわせると「浅田隆著『葉山嘉樹論―海に生くる人々』をめぐる―」「葉山嘉樹「淫売婦」の女」「広野八郎著『葉山嘉樹・私史』―解説にかえて―」「葉山嘉樹と室蘭」「宮嶋資夫と葉山嘉樹」「葉山嘉樹断片」「浅田隆著『葉山嘉樹―文学的抵抗の軌跡―』」「葉山嘉樹・人と文学」といった八編が第二卷にはあり（これらのうちの四編は前掲書『葉山嘉樹

―考証と資料』Ⅱに収録されている)、第一巻とあわせれば、合計十八編の葉山論を数えることができる。もちろん、これら以外に第三巻には『年譜 葉山嘉樹伝』という大部の年表がある。

さらに、編纂書として、一九七五年から翌年にかけて筑摩書房から刊行された『葉山嘉樹全集』全六巻(編集委員は金子洋文・中野重治・寺田透・小田切秀雄・浦西和彦)および『葉山嘉樹短編小説選集』(郷土出版社、一九九七年)がある。『葉山嘉樹全集』があのようなたちで読めるようになったのも浦西先生のお陰だろう。

\*

これだけの葉山研究の蓄積をみて思うのは、数々の論考や全集の編集もさることながら、やはり『浦西和彦 著述と書誌』第三巻『年譜 葉山嘉樹伝』の質量ともに充実した成果である。日本近代文学研究では、荒正人の『漱石研究年表』がしばしば話題になるが、それに勝るとも劣らないこの年譜研究は圧倒的な存在感でせまってくる。ここには、一八九四年に福岡県京都郡豊津村に生まれ、一九四五年に開拓団員として渡っていた中国東北部、ハルピンの南方、徳恵駅すこし手前の列車の中で病死した葉山嘉樹の五十一年七ヶ月足らずの人生が、一日一日、日を追って詳述されている。作品批評はもちろんのこと、葉山は日記を残していたから、その記述に従った部分が多くあり、またそれ以外の多様な資料を駆使して、葉山の人生を生き生きと組み立てている。読ませる年表は『文化運動年表 明治・大

正編』『文化運動年表 昭和戦前編』(ともに三人社)をはじめとして、浦西先生の得意技であったが、この『年譜 葉山嘉樹伝』も同様に読んでいてあきない年譜となっている。

というのも、現在、『昭和戦前期プロレタリア文化運動資料集』(丸善雄松堂)を読む研究会を行っているなかで、葉山嘉樹が発行編輯兼印刷人であった稀少雑誌『労農文学』を一号から読んでいるが、この『労農文学』に関するさまざまな情報が『年譜 葉山嘉樹伝』に記載されているのである。これまで『労農文学』は『戦旗』派に並ぶ『文藝戦線』派の有力な雑誌として知られてはいたものの、復刻版もなく、所蔵館もばらばらで一括して参照できる状態ではなかった。DVD版として『昭和戦前期プロレタリア文化運動資料集』が刊行されたことは嬉しいことであつたが、それも浦西先生の所蔵資料によつて可能になつたのだという。そして、実際に研究会で雑誌を読むようになって『年譜 葉山嘉樹伝』がいかに豊かな内容であるかに改めて気づかされたのだつた。

『労農文学』は一九三三年一月に創刊されたから、『年譜 葉山嘉樹伝』一九三三年の記述をみると、村松梢風や長谷川伸や直木三十五がこの雑誌にそれぞれ援助金三十円ほどを出していたことが分かり、意外なことであつた。また、この年一月二十三日には堺利彦が亡くなるので、同郷のこの先輩の通夜、火葬、葬儀に参列し追悼文を書いたこと『労農文学』第三号に葉山が書いた追悼文「堺利彦氏を弔う」が荒畑寒村や堺真柄の文

章とともに掲載されている)、二月二十一日には夕刊で小林多喜二の死去を知ったことなどが記述されている。小林多喜二の死については、連日記載されている日記からの引用がなされていて、浦西先生の論文『「海に生くる人々」と「蟹工船」のなかでも葉山と小林多喜二との交流と文学性が報告され、また中野重治、寺田透、浦西和彦三名による「葉山嘉樹〈昭和の文学・鼎談〉」(『群像』一九七五年三月号)においても詳しく語られている。二月二十三日の日記には「小林多喜二の屍体の解剖を、どの大病院でも断つた。通夜に集まったものは片つ端から検束。無茶だ。今日午後一時から告別式だと云ふ。行つて、歪んだであらう顔を見て別れを告げよう。可哀想なことをした。政治的には意見を異にしてゐたが、好きな男だったのに。」とあり、浦西先生は右論文において「小林多喜二とは政治党派的に対立拮抗していたが、葉山嘉樹は小林多喜二に対する個人的な深い好意を日記に吐露している。しかし、葉山嘉樹と小林多喜二は、生前一度も会つたことがなかったようだ」と書かれている。『労農文学』には、堺利彦の追悼特集はあつても小林多喜二の記事は見られない。だが、葉山の多喜二への注目をこのように特筆する浦西論文によって、雑誌の誌面に現れただけではない実情を知ることができる。

\*

さて、この『年譜 葉山嘉樹伝』からは、坂下女子高等学校赴任時からはじまつて葉山嘉樹へと求知的に研究を進めていっ

た痕跡と、その一方、葉山嘉樹から遠心的に研究が広がっていった形跡とがうかがえる。その双方ともが重要だ。広がっていったなかには、たとえば「田口運藏の葉山嘉樹宛書簡」に見られる田口運藏についての研究もあつた。『労農文学』第一号の目次には、田口運藏の「レニンからの伝言(全文削除)」とあり、雑誌のなかほどに「本誌の刊行は出版法によるので、同志田口運藏の『レニンからの伝言』は、遺憾ながら全文削除の余儀なき結果になり」と事情説明されている。『文藝戦線』同人、また『労農文学』同人でもあつた田口運藏は、文学研究の場面ではそれほど知られてはいないだろう。のちに荻野正博『弔詩なき終焉——インターナショナルスト田口運藏』(御茶の水書房、一九八三年)がまとまるが、それ以前に浦西先生は右の「田口運藏の葉山嘉樹宛書簡」(関西大学『文学論集』一九七五年十一月、創立九十周年記念特輯に初出掲載、『葉山嘉樹——考証と資料』に収録)をまとめていた。

それによれば、田口運藏は、一八九二年に新潟県に生まれ仙台二高を中退後、密航者として海外放浪し、アメリカで片山潜とともに活動、アメリカ共産党入党後はソ連に行つて、日本人として初めてコミンテルン第三回大会に出席し、レーニンとも会見している。一九二三年の後藤新平とヨッフフェの日ソ予備交渉のさいに、ソヴェト全権ヨッフフェの秘書として帰国した。このように革命運動史における重要な役割を果たしながら、田口運藏の晩年は不遇であつたという。浦西先生は、田口が肺結

核や貧困と闘いつつ、別府、東京、御宿、伊東と療養生活を送りながら葉山にしたためた手紙を翻刻紹介した。紙幅の関係上、ひとつひとつの紹介はできないものの、葉山とのつながりや『文藝戦線』を田口が親しく考えていたことがわかる手紙のそれぞれが興味深い。また田口について、浦西先生はこうも言っている。「田口運蔵は第一次日本共産党にも、またその後の第二次日本共産党にも正式に参加しなかった。日本共産党そのものが、田口運蔵のような人物を組織の中に抱擁するだけの成熟さに、まだ到達していなかったであろう。田口運蔵の日ソ予備交渉の画策は、日本共産党と関係のないところでなされた。しかし、ヨッフエが来日したという事実は、ソビエト政府がいかに田口運蔵に大きな信頼を寄せていたかを明瞭に示しているであろう。」日本マルクス主義の研究が講座派の人々を中心に進められるのは当然であろう。しかし、それ以上に講座派以外の人々の活躍が再検討されないことには、運動そのものの動態的把握が出来ないのではないか。田口運蔵などの思想的検討は日本マルクス主義研究のこれからの課題の一つであろう」。主流の講座派ではない領域、見過ごされた人物にもスポットを当てることが一九七五年の段階で提起されている。このような田口運蔵研究も浦西先生の葉山研究から広がった成果のひとつとして重要なものであろう。記憶しておきたい。

\*

最後になったが、肝心の葉山論において何度も書かれるエピソード、

ソード、葉山の二児「餓死」のことに触れておかねばならない。『葉山嘉樹―考証と資料』を読んださいに、一番印象に残ったのがこの二児についてのことであった。前掲の中野・寺田・浦西の鼎談「葉山嘉樹〈昭和の文学・鼎談〉」でも、浦西先生はこのことに繰り返し言及し葉山が非常に子煩悩だったと語っている。一九二四年十月に名古屋共産党事件で禁錮七ヶ月、未決通算六十日に決定、その後、巢鴨刑務所入獄中に妻子が行方不明となり、数え年五歳と四歳の男の子（長男の嘉和、次男の民雄）が相次いで死んでしまったことがたびたび記述されているのである。「餓死」という衝撃的な言葉は、葉山の小説「誰が殺したか」に出てくる言葉だが、「葉山嘉樹―悲惨なる過去」の「拘束」では「二児の死は葉山嘉樹に大きな衝撃を与え、その後の作家・葉山嘉樹の生き方を決定してしまったといつてよい」と言われている。刑期を終えたあと、行方不明の妻子を探して心当たりを探しまわったものの絶望におわり、名古屋の労働組合運動には復帰せず、木曾の落合水力発電所の工事現場へ行く。ここにいる間に息子たちの死を知り「飲酒の癖を覚え」「ひどくニヒリスチックになってしまった」（自作年譜）という。犠牲者の家族に対する組織的な救援活動などなかった時代に、残された家族は途方に暮れたに違いない。

巢鴨刑務所入獄のまえ、一九二三年六月に収監された名古屋刑務所には、妻の喜和子が子供を連れて面会にきていた。『年譜 葉山嘉樹伝』には、葉山の「獄中記」から多く引用されていて、

「会へないと淋しい」と書く葉山がいかに妻子思いであったかがうかがえる。一九二三年九月七日には「此四日、きわ子は名古屋から離れてゐるやうな気がする。若き燕がゐたのか、きわ子が来た。一日赤尾(穂)に泊つたと云ふので嫉けた。が、今はそんな時ではない。食へさへすればいいのだ。命さへあればいいのだ。もう彼女が他の男と結婚してもいいから丈夫で子供を育ててくれ。俺はもう俺の運命に見切りをつけた。あゝ人世は苦しいものだ。泣くにも泣けない苦しさだ」と引用されている。妻がほかの男性のもとに走ったのか、嫉妬の思いを抱きながらも、命さえあればいい「丈夫で子供を育ててくれ」と願う葉山の痛切な声が響いている。

「葉山嘉樹は、愛児二児も「餓死」させてしまったという「悲惨なる過去」を背負うて、プロレタリア文学運動に入った」。葉山文学の根柢にあるものを、前掲論文「葉山嘉樹―「悲惨なる過去」の拘束」で浦西先生はこのように語る。そして、労働運動に挫折し、家族を失い、そこから文学運動に入っていた葉山は、なにか問題があったときには常に労働の現場に、それも社会の底辺で働く人のところに帰って行くという。そういえば、中野重治「村の家」のなかで父藤作が転向後の勉次にむかって筆を捨てよと言ひ、土方に行っている里見がまっとうな人間のやり方だと語っていた、その里見は葉山嘉樹がモデルであった。そこには勉次が否定した「畏」につながる問題点があったとはいへ、葉山嘉樹は、浦西先生によれば常に社会の底辺で働

く人のところに帰って行く人だった。

このような葉山の文学、葉山嘉樹という人をまるごと掴まえるようにその人間性を明暗含めて立体的に描き出した浦西先生の研究は、いまもなお文学研究のひとつの指針として屹立しているだろう。それは、峻嶺として私ども後進の前に聳え立っている。だが、後進を峻拒するのではなく、多くの恵みを与えてくれる豊かな嶺である。大阪文学や温泉文学など軽みのある洒落な文学にも造詣が深かった先生の文学観の根柢には、坂下町以来取り組んできたこのような「葉山嘉樹」があったのではない。ただし、両者は対立しているのではなく、共通するその原形は、理論重視の観念的抽象性とはおよそ無縁の、具体的な庶民の生活に基盤をおく人間研究にあった。その時々の研究の流れに左右されない、プロレタリア文学研究における資料博搜の徹底も、そこに通じているように私には思われる。(二〇一九年一月三日)